

## 大西マサエ先生を偲んで

馬杉一重 (元女子大学教授)



## 大西マサエ氏略歴

一九〇年三月三日生まれ。一九二二年神田女子職業学校甲部高等師範科を卒業後、一九二三年同志社女学校教員。一九五一年女子大学専任講師。一九五四年同助教授。一九六二年同教授。一九四九年には奉勤務者として表彰を受けられ、一九六五年二月定年退職されるまで教育と研究に尽力された。一九七七年六月六日四時永眠。九十七歳。

先生ご在職の大正末期から昭和五十二年まで、とりわけその前半の戦中戦後は同志社にとつての激動の時代で、その中の教育者としての歩みは、本当に多難の日々であられたと思われまます。

でも先生は、いつも前向きな姿勢を持ち続けられました。その一つがパリ留学でした。それは、昭和十一年同志社女学校の先生になられて十年余りの時です。その頃は女性の、それも幼児を抱えた家庭婦人の留学は全く驚異的なことでしたが、当時のわが国には、まだ入っていないが、かつた本場の洋裁を研究するために、あえてパリまで行かれたのでした。

その成果が生かされて、戦後は同志社女子大学で定年ご退職の日まで、ひたすら大学の被服学教育の道を歩まれました。

また、この同志社の教員でいらした五

十五年の間に先生のご愛に触れ、変えられ、大きく成長した学生の数は、驚くばかりです。先生は、時々本当に厳しく叱られました。先生は、時々本当に厳しく叱られましたが、叱られた学生が、そのあと先生を心からお慕いするようになり、すっかり変えられるのは見事でした。そこには、学生一人一人の可能性を信じ、それを生かす育むために、妨げになるものは、なんとしてでも排除したいという本当の教育者の愛があったのです。

先生は、また何か問題を抱えている学生を見過ごしになさることは決してありませんでした。その学生を、頼ってくれば卒業生をも研究室へ、時にはお宅へまで招いて話を聞いて下さるのでした。それが経済的な問題である場合には、惜しみなく援助の手を差し伸べられました。

一方、ご自身は、決して無駄な事はなさいませんでした。布を裁断されるのを

見ていて、その裁ち端の少ないのには驚きました。普通に裁つ半分くらいの布で服が出来てしまい、しかも出来上がった服には、本場のパリのセンスが、生かされているのですから、いよいよ驚かされます。

女子大が女子部のバザーに協力していた頃の、先生のご指導による学生たちの見事な製作品の数々、また毎年行われる英文科のシェイクスピア劇のコスチュームが先生のご指導によっていたことなども懐かしく思い出されます。

洗礼こそ受けておられませんでした。「わたしの信じているのは、やはりキリスト教です」とおっしゃっていらした先生です。いまは、天国で、先に召された同志社の方々、この上なく楽しいお交わりを持っておられることでしょう。

## 高橋勘先生を偲んで

上田堅一郎（元高等学校教諭）



## 高橋勘氏略歴

一九一四年（〇月）一日生まれ。一九三八年三月東京物理学校高等師範部を卒業後、同年四月同志社中教諭として入社。一九四八年高等学校教諭、高等学校教頭、高等学校校長を歴任。一九六五年には永年勤務者として表彰を受けられた。また、一九六九年八月から一九七一年四月まで、校長法人同志社理事。一九五一年六月から一九五四年五月まで、校法人評議員として、学校運営のためにも尽力された。一九七七年六月二日永眠。八十三歳。

高橋勘先生は昭和十三年、同志社中学に赴任して来られた。丁度同じ年に私は同志社中学校に入学した。三年生のとき、先生に司級（当時、同志社では学級担任のことを司級と称していた）をしていただいた。しかし、学年半ばで召集令状が来て、先生は戦地に赴かれた。一、二ヵ月後、私は先生から一枚のはがきをいただいた。大陸の月は云々という短い文面だったように記憶しているが、当時の常識としては、海を隔てた戦地からわざわざ、一介の教え子に便りを送るというようなことは考えも及ばなかっただけに、強烈な印象として私の脳裏に残っている。

昭和二十三年、同志社高校に勤めることになった私は、今度は高橋先生に、先輩の同僚として、また、上司としてご指導いただくことになった。丁度新制高校

が発足した年で、先生は教務主任として、山田貞夫校長のもとで非常に意欲的な活躍をなさっておられた。岩倉移転、超学年制の完全自由選択制カリキュラム、男女共学、それらに伴う施設の充実等々。新しい高等学校像を模索して、先生が最もその手腕を発揮された時期である。現在の同志社高校のかたちの大部分が先生の努力の結晶であるといっても過言ではないと思う。その後、先生は教頭、校長として名実ともに同志社高校を背負って生まれ、その充実発展に多大の功績を遺されたのだが、後年、先生は私に、自分にとつてこの時期は、教師として最も不本意な時期であったと述懐しておられる。そうかも知れない。というのは先生の真骨頂は管理者としての姿ではなく、カンチャンの愛称で親しまれる生徒との出会いの中にこそ発揮されていた。授業

中、宿題を忘れた生徒に運動場を走らせたり、礼拝をサボって遅れて来る連中を校門前で叱咤したりの厳しさと同時に、どこまでも生徒を信じる愛情があった。先生のお宅はしばしば宗教部の生徒たちや、授業で先生の世話になった卒業生たちで溢れていたことを思い出す。

先生は定年間近、病のため半身の自由を失われた。しかし、リハビリのための散歩は欠かされたことがなく、卒業生の同窓会にもよくご出席になった。お元氣ですかとご挨拶すると、きまつて、「有難うございます。死ぬまで生きます」とのご返事。神から与えられたご自分の生命を最後まで大切にして生きようとなさったのではあるまいか。己が馳せ場を走り切つて天上に召された先生の霊の上に神の祝福を祈ること切である。

# 中桐大有先生を偲んで

吉田謙二（大学文学部教授）



中桐大有氏略歴

一九二二年四月一日生まれ。一九三五年三月京都帝国大学文学部哲学科を卒業。京都帝国大学大学院修了。一九四七年同志社大学予科教授に就任。一九五二年から大学文学部教授。一九六二年一九六六年には教務部長を兼任された。一九七二年は永年勤務者として表彰を受けられた。一九八二年名誉教授。一九九七年八月一日一四時六分永眠。八十六歳。

中桐大有先生に初めてお会いしたのは、学部二年次の秋であった。すでに先生はその人ありと知られた令名高い科学哲学者であり、一学生としては勇を鼓しての面会であった。

先生は懇切に助言して下さいました。以来、四十年御指導賜った。その先生が八月十六日に卒然として身罷られた。数年前に脳梗塞に倒れたのを見事に恢復され、手足に多少の不便は残ったものの、去る七月末には四百枚程の論考を書き上げ、これから地球環境を含む宇宙の問題に取り組むというお便りを頂戴したばかりであった。いつもながらの積極的な問題意識と学究的態度に、我身の怠慢を恥じ、反省こそすれ、先生が逝去されるなごと思えばなかつた。そのため、お返事も差し上げず、そのうちお伺いしようと思しさに追われて過ぎてしまった。先

生は八十六歳になっておられた。

先生は予科教授の頃から広く学生に呼びかけて、京都の神社仏閣を訪ね、名僧知識に接し、一夕、卓を囲んで人生の実相に迫る談論の会を催しておられた。「白雲会」と称する。悠々たるべき心境を託しての命名であったにちがいない。そこからは実業界、学界で活躍中の多くの俊秀が育った。寧静館五階の東端にあつた先生の研究室で、学部、大学院の九年間、折に触れて先生は「白雲会」のことを楽しそうに語られた。入会するように熱心に薦めて下さった。しかし、私は終に参加しなかつた。なぜか入会する資格に欠けているように思えたからである。私には達するべく示されている心境が遠く重すぎた。最初のお誘いをうけたとき、数えれば先生は四十九歳であつた。

研究指導は一切の妥協を許され

なかつた。いつも指定された原書を二、

三十頁ずつ読み進んだ。段落ごとに解釈を迫られ、先生との一対一の論議はいつ果てるとも知れなかつた。未熟者は疲れ果てた。しかし、そのうち小生意気になって、卒業論文でも、修士論文でも先生の間違いを主張して譲らず、原著者の回答をイギリスから取り寄せたりして勝ち誇つた。小憎らしい学生であつた。

それでも先生はあちこち就職をお世話下さり、結婚に際しては仲人を引き受け、また、何か仕事を世に出す度に心から喜んで下さった。その先生と幽明境を別にしてしまった。まだまだ見守っていただけなかつたのに。黙禱。